

校長先生のお話 No.7

～ 何のために生きる ～

ぼくらはみんな 生きている 生きているから 歌うんだ
ぼくらはみんな 生きている 生きているから 悲しんだ

「手のひらに太陽を」という歌ですね。この歌の歌詞を作った人が「やなせたかし」さんです。聞いたことがあるでしょう。そうです。「アンパンマン」の作者です。

やなせさんは、マンガ家としてあまり売れませんでした。ずっとヒット作が出ない日が続いたそうです。でも描きたいテーマはあふれていました。

そのころ日本は受験戦争（じゅけんせんそう）といって、子どもたちが、学校が終わって夜の 10 時、11 時くらいまで塾（じゅく）に通うような時代でした。ざんこくなシーンがたくさん出てくるマンガやテレビがやり、思いやりとかやさしさがどんどん失われていることに、やなせさんはとても心配していました。

やなせさんは「やさしさがあふれるマンガをかきたい」と強く思いました。そこで思いついたのが、「かっこわるいけど、やさしいヒーロー」がかつやくするマンガです。おなかをすかせた人のために、自分の顔を食べさせてあげるアンパンマンです。

ところが本が売り出されると「顔を食べさせるなんて、ざんこくです。」とたくさんの苦情（くじょう）がやなせさんにとどきました。そのせいで、次の本は出せなくなりそうでした。でも、「このマンガを読むと勇気づけられる。」という声もたくさん聞こえてきて、ついに第 2 作目が出せることになりました。こうしてアンパンマンは国民的なマンガになったのです。

2011 年、東北地方を中心に大きな地震（じしん）が来ました。2 万 2 千人以上の方がなくなり、もっと多くの方がひなん所（ひなんしよ）になりました。「日本がこんなひどいことがあったのに、マンガをかくことしかできないぼくはダメな人間だ」と、やなせさんは悲しい気持ちでいっぱいでした。でもひ害（ひがい）が大きかった地域のラジオ局にある曲のリクエストがたくさん来るようになったのです。「アンパンマンのマーチ」です。「はじめて聞いたけどはげまされた」「ずっと悲しんでいた子どもが笑った」という手紙が届いたのです。

やなせさんはその前から重い病気にかかっていた。「もうマンガはやめよう」そう思っていたのですが、その手紙を読んで「引退（いんたい）はやめだ。アンパンマンといっしょにみんなを助けるんだ」と、病気の体で無理をしていろいろな活動をしました。とうとう病院のベッドでマンガをかき続け、2 年後になくなりました。最後の言葉は、「みんなありがとう。」だったそうです。

なんのために生まれて なにをして生きるのか
答えられないなんて そんなのはいやだ！
今を生きることで 熱いところ燃える
だから君は行くんだ ほほえんで

やなせたかしさんの伝記をしょうかいしました。学校にありますので読んでみてください。何のために生きるのがほんのちょっとだけわかったような気がしてきます。

秋の夜長、こういう本をお子様に借りてきてもらい、いっしょにページをめくるじかんをつくってみてはどうでしょうか。なかなか小学生までしかできない経験だと思います。